



むせてんじゃねえよ

死ぬ気で
飲め



これは私がかつて騎士として
街道の警備をしていた頃の話



怪しい奴



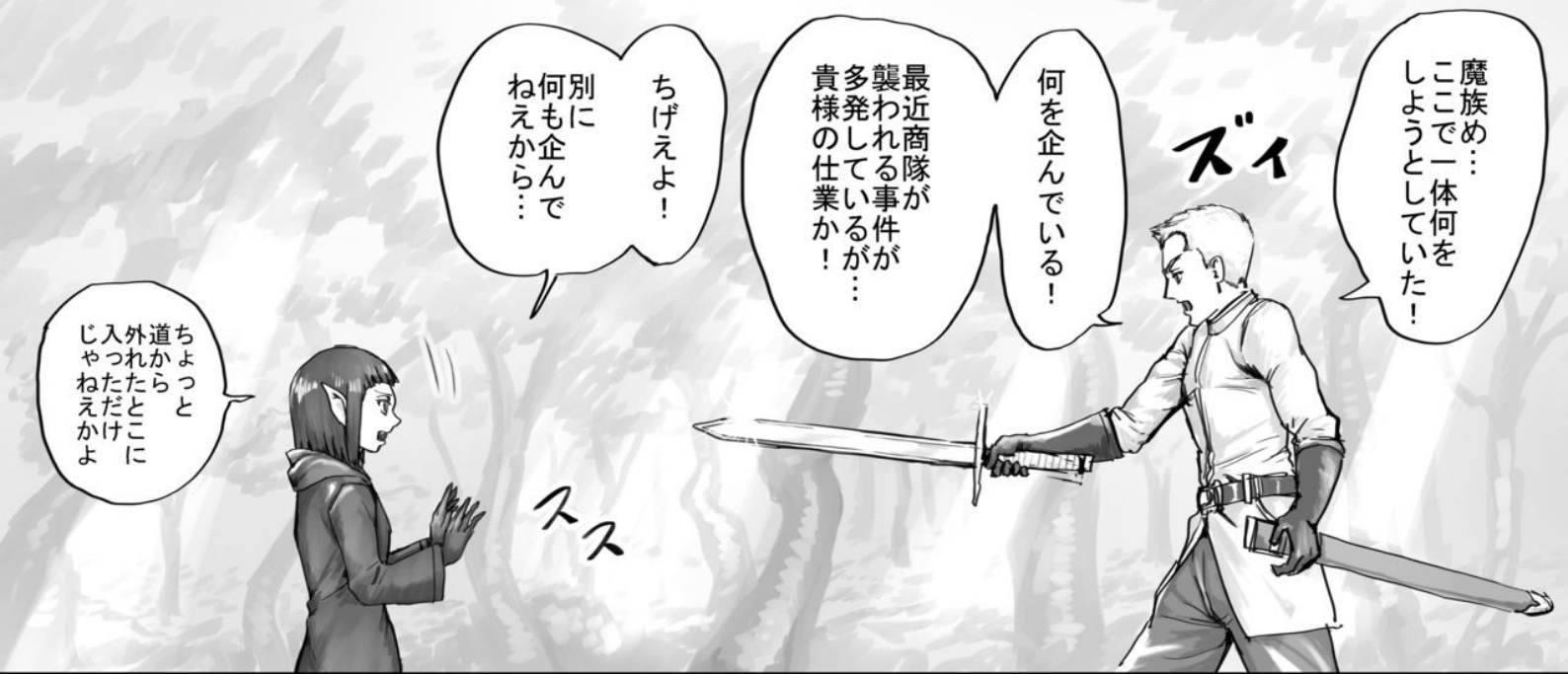
む、あれは...



フッ
フッ







魔族め：
ここで一体何を
しようとしていた！

ズイ

何を企んでいる！

最近商隊が
襲われる事件が
多発しているが…
貴様の仕業か！

ちげえよ！

別に
何も企んで
ねえから…

ちよつと
道から
外れたと
こに
じゃた
ねえか
よ

スス



魔族は存在自体が
罪なのだ…

よって
ここで
私が
貴様を
裁く！

あークソ
話通じねえな…



何も用が無いのに
こんなところに
入るわけなかるう！

マジで何も無いから

なあ
勘弁してくれよ
道から外れることが
そんな悪いことなのか？



あのなー
調子に乗んなよ…
私は温厚な方だから
話し合いで
解決しよう

その気になれば
おまえなんか
速攻ボコせる

人間が魔族に
タイマンで勝てる
わけねえだろ！

イラッ

冷静になつて
考え直せ
そうすりや
見て見ぬ振り
してやつから…

弱者ほど
強い言葉を
使いたがるな
ビビっているな

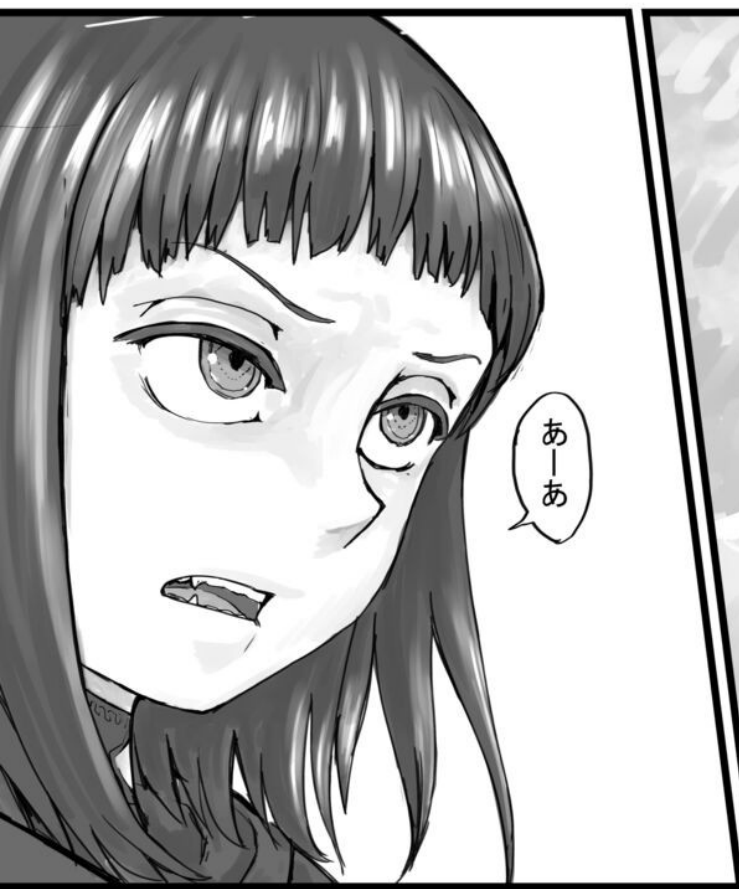
…ぬかせ



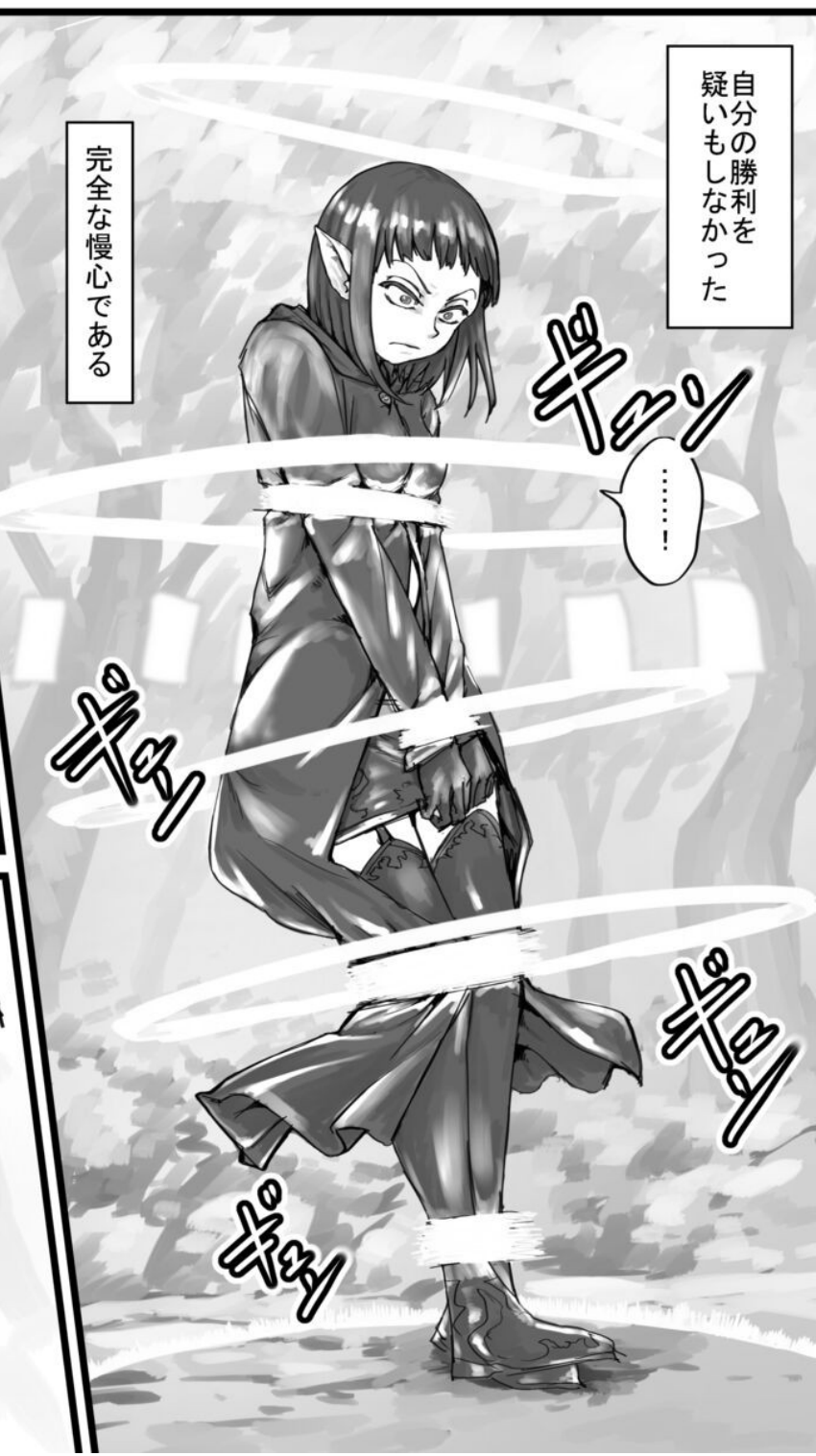
問答無用!

緊縛の光輪

この時の私は
若さのせいかな...



あーあ



自分の勝利を
疑いもしなかった

完全な慢心である



もう引けねえぞ...

魔族とは

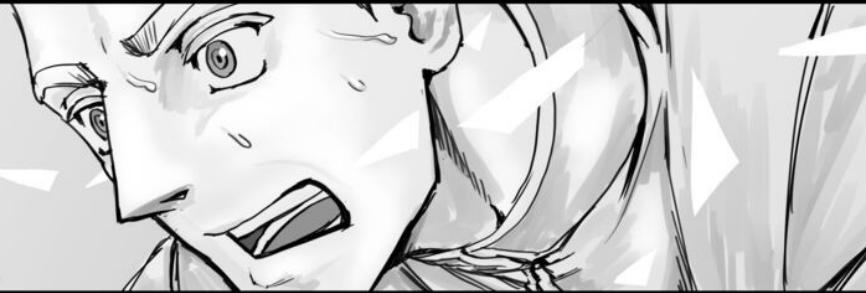
太古の昔
血塗られた系統実験に
よって人工的に作られた
種族…

エルフに
匹敵する
魔力…



な…

私の魔法が
一瞬で…!?



だが…

私の剣の
ほうが疾い!



その戦闘力は



ドキキ

吸血鬼と並ぶ
身体能力を併せ持つ

私の
斬撃を
止めただと

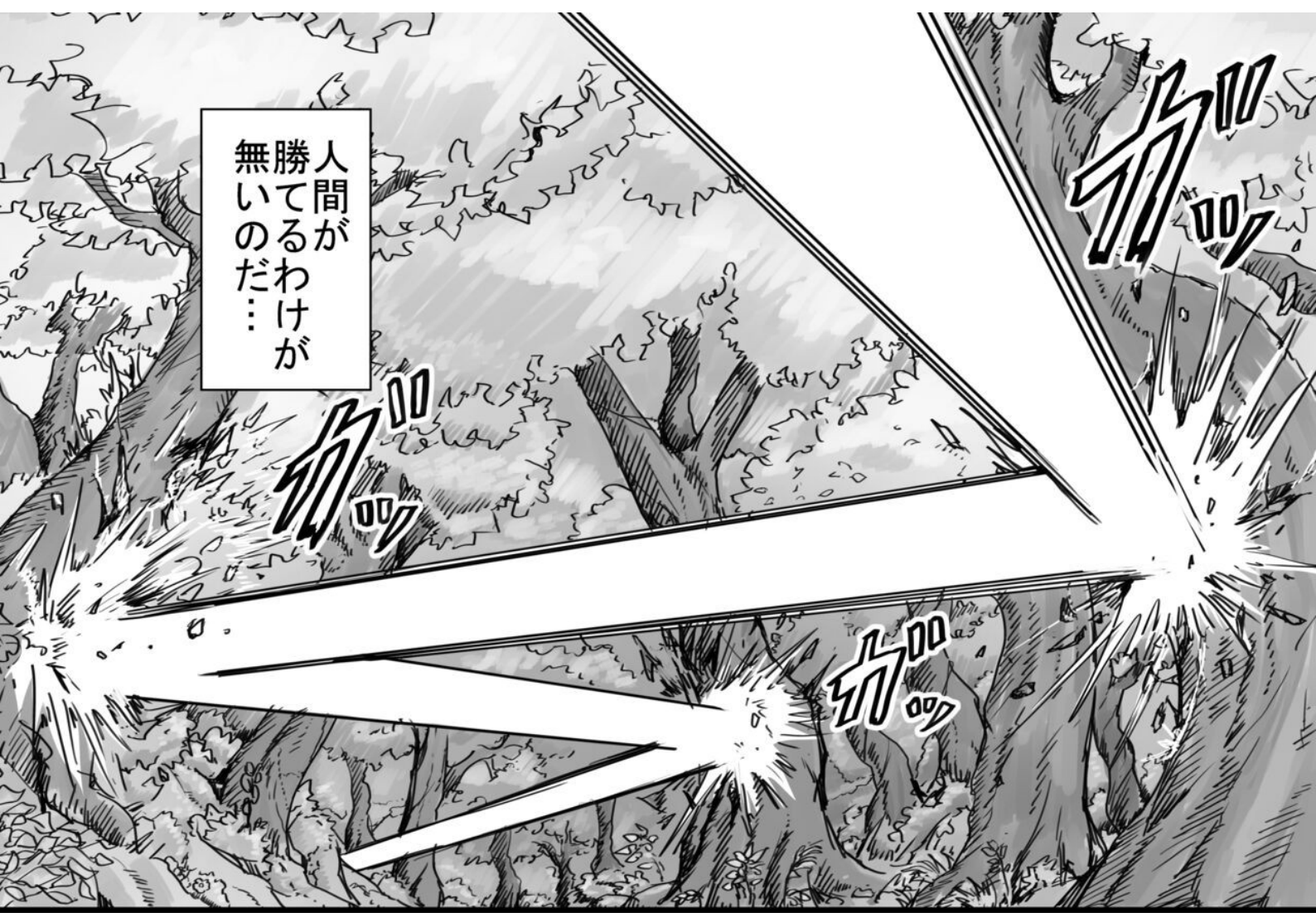


素手で



竜にも匹敵する

人間が
勝るわけが
ないのだ…





まあ
お前も次で死ぬけどな



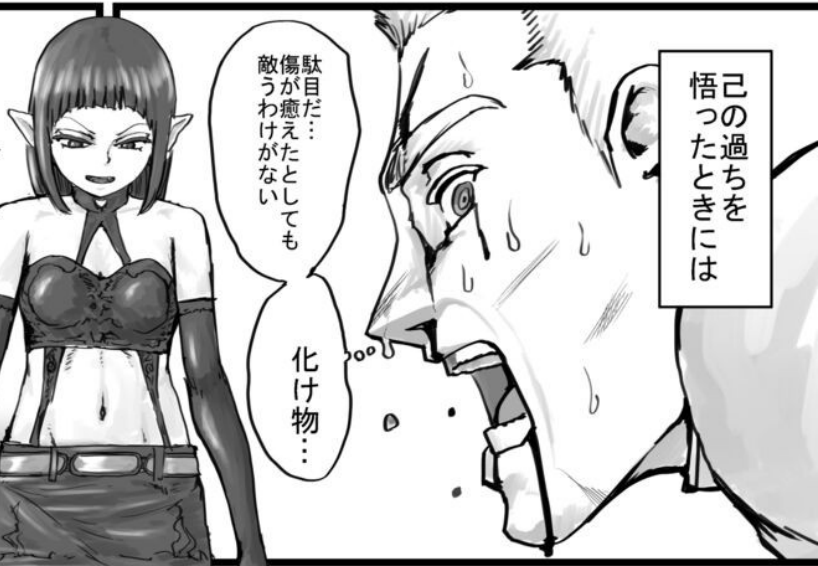
自動治癒魔法が
間に合わない

普通の奴なら
死んでるよ



死はもう
すぐそこまで
やってくるよ

スタ



己の過ちを
悟ったときには

駄目だ...
傷が癒えたとしても
敵うわけがない

化け物...



私は生き残るため
一縷の望みを託して
ある行動に賭けた



今...
何が出来る...

考えろ...

絶対服従犬のマネ!

きゃうん
きゃうん

私の負けでふー

許して
ください

私が悪かでした

完全なる降参である

可愛らしい
無邪気な犬を
踏み潰せる者は
踏み潰せない者
は

相手の良心に
訴えかける
心理作戦だった

御慈悲をー

この無知で
非力な人間風情に
どうか寛大な処置を

きゃう
きゃう

お願いしますー
魔族様

わー
ゴミを見るような目で
こちらを睨んでいるー

ズリ





そう言うのと
彼女は徐に
下着を脱ぎ始めた

ズギ

スル

え…!

な、何を



教えてやろうか



シヨンベンだよ

ずっと我慢してたから
おもって済ませようとおもったんだ

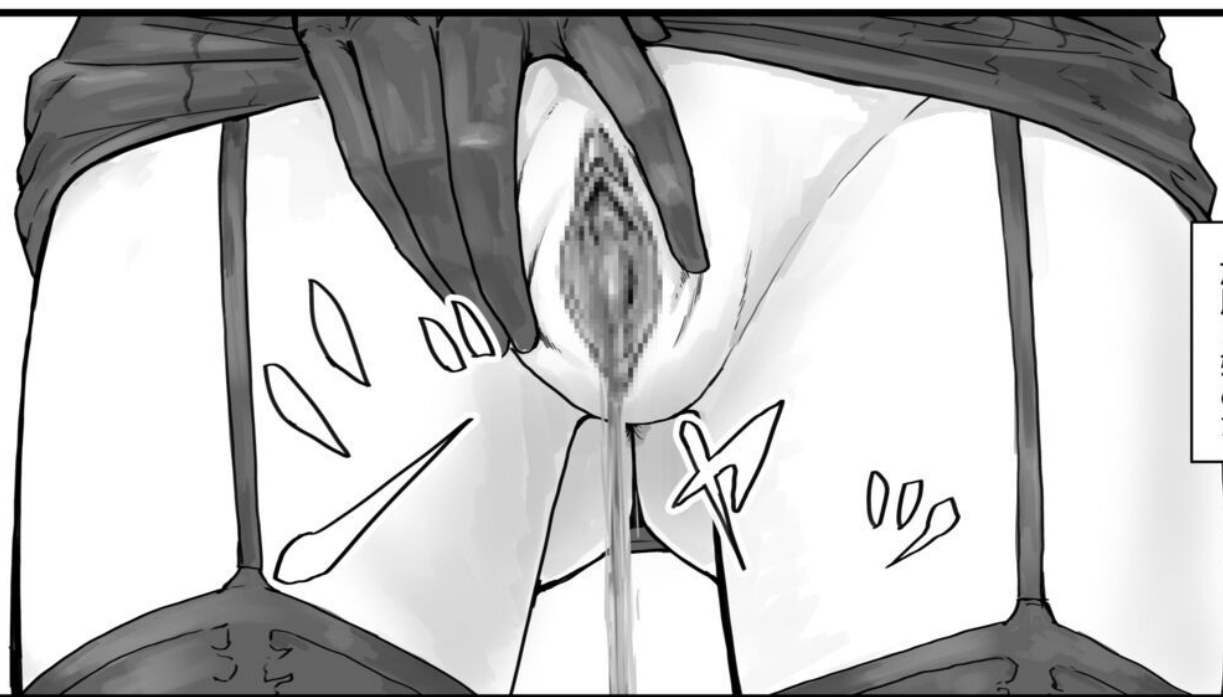
それをてめえ
邪魔しやがって…

クパ

きちんと
口を開けて
飲みよ
便器野郎

はひ

ムカつくから
全部に
てめえに
ぶちまけるわ



言うやいなや
勢いよく
女は始めた
放尿し



死ぬ気で
飲み
むせてんじゃねえよ



凄まじい勢いで
小便が口に
なだれ込む

私は生き残るために
必死にこの女の
小便を飲もうとした

グボ

シボシボシボ

このカスが！

てめえが魔法で締め付けた
せいでちよつと
パンツに染みちまった
だろうが！

どうだ？
私のシヨンベンの
味はよー

濃度の濃い
小便が口の中
でエールの様
に泡立ち
得も言えぬ
気持ち悪さを
醸し出している

シボ

あー我ながら
今日のシヨンベン
くっせえわ…

よく飲めるな

シボシボ

エグミが
ヤバい

しょっぱ
不味い

何より臭いがキツ過ぎる

シボシボシボ



女の小便は
凄まじい量で
衰えなかつた

こぼれまくってんぞ!

全然飲めて
ねえじゃねえか!

ちやんと
飲めよ

ピク

ピク

ゴボレ

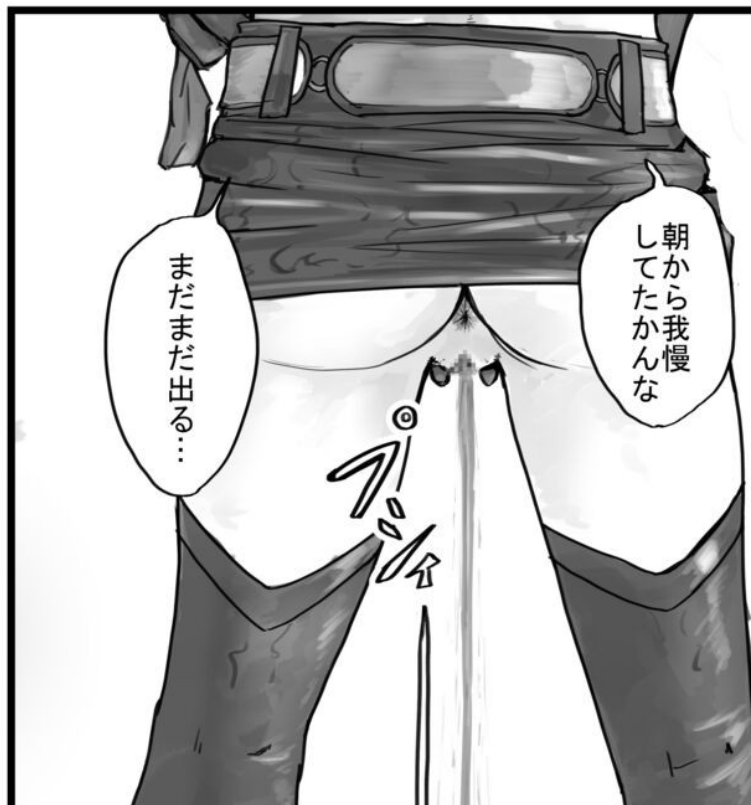


鼻にも容赦なく注ぎ込まれ窒息しそうだった

あまりの不味さと量に
飲み干した小便が
逆流しそうになる

グボッ

ドポポポ



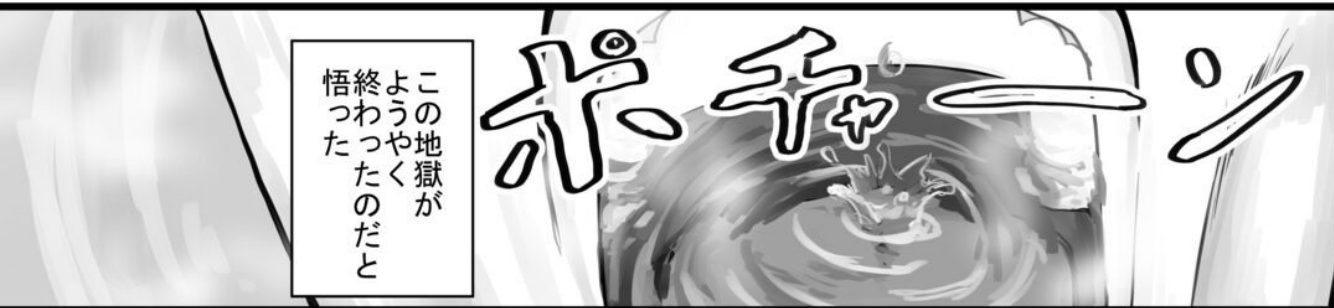
朝から我慢
してたかな

まだまだ出る...

グッ



一分を優に過ぎた
ところですよやく
勢いも弱まってきた



この地獄が
ようやく
終わったのだと
悟った

ポキーン

口の中の
尿溜まりに
雫が落ちる
感覚で



おら
口の中の
飲み下せよ
シヨンベン

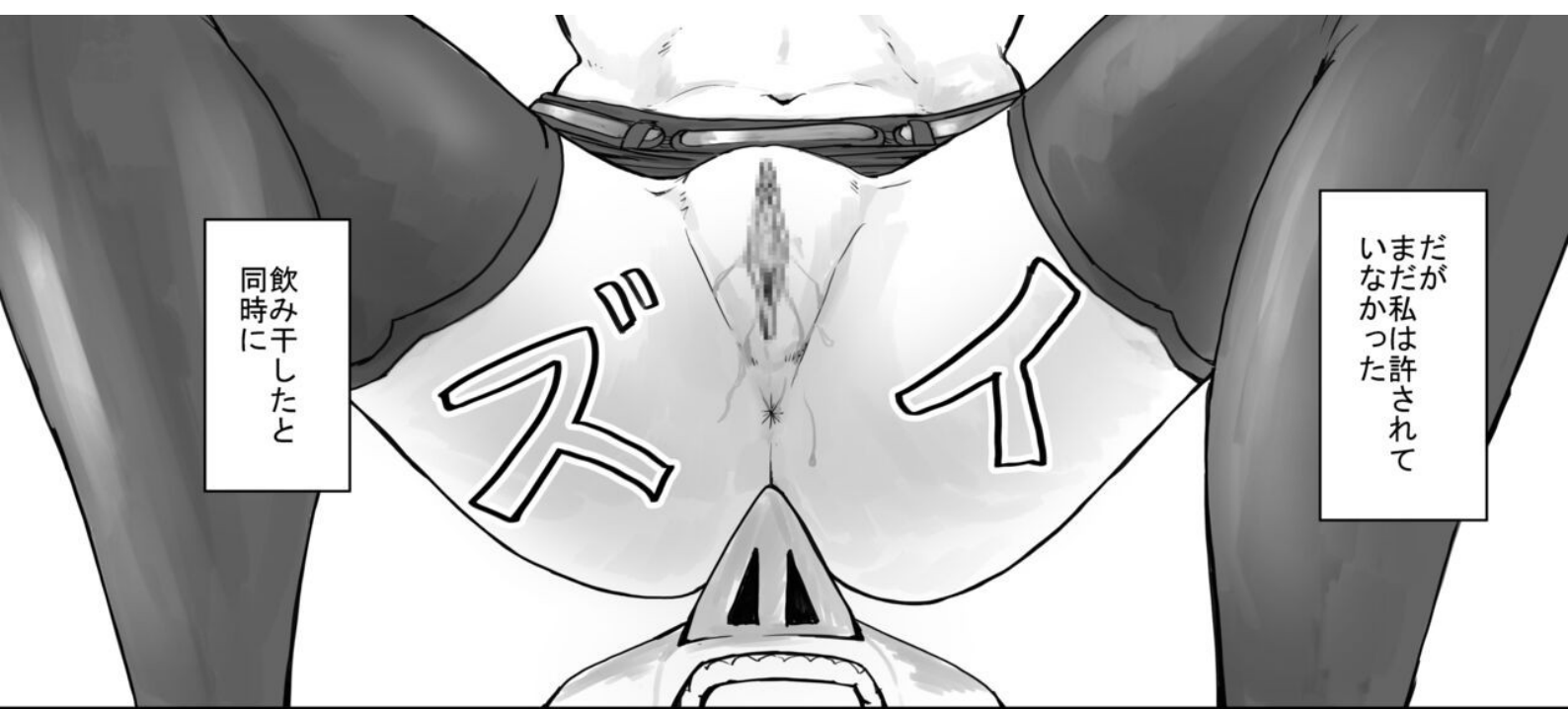


ふー出た出た



これで彼女が
満足して
くれたら
ば

吐き気を抑えて
根性で飲み干す



飲み干したと
同時に

まだ
私は許されて
いなかった



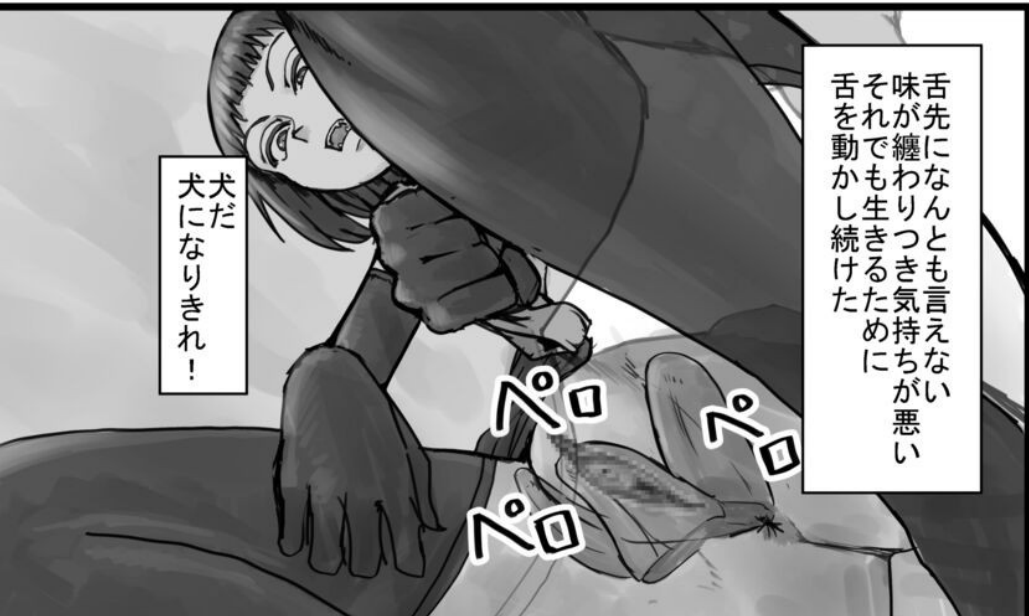
次なる
要求

舌使って
アソコ綺麗に
しろ



彼女の下半身が
私の顔に
かかった

きつ...



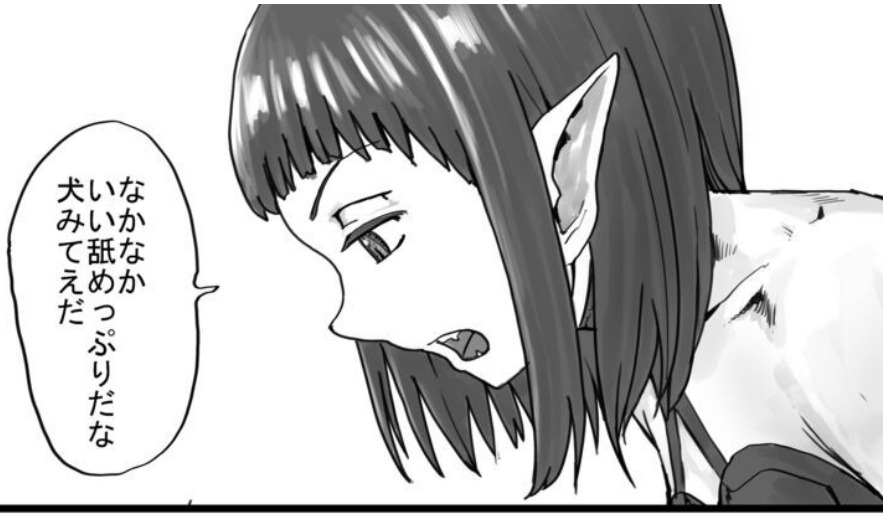
犬だ
犬になりきれ!

舌先になんとも言えない
味が纏わりつき気持ち悪い
それでも生きるために
舌を動かした



クニニはしない主義の
私が女の陰部を貪る
ように舌で奉仕した

必死で舐めた

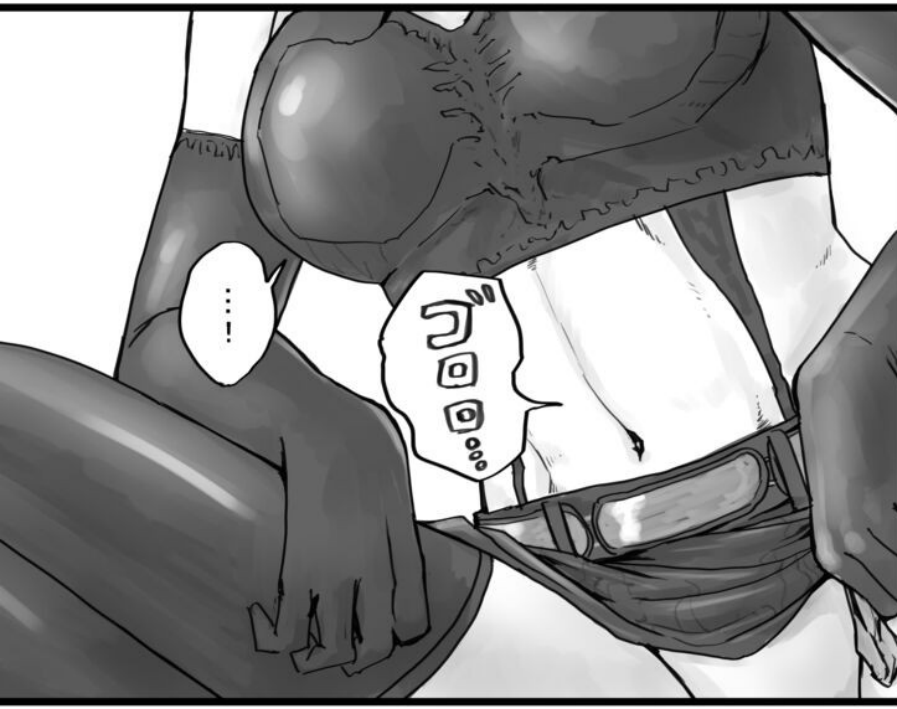


なかなか
いい舐めつぶりだな
犬みてえだ



彼女の尻肉に鼻を塞がれ
辛かった
上手く息ができないのも

もう勘弁してくれ…



……



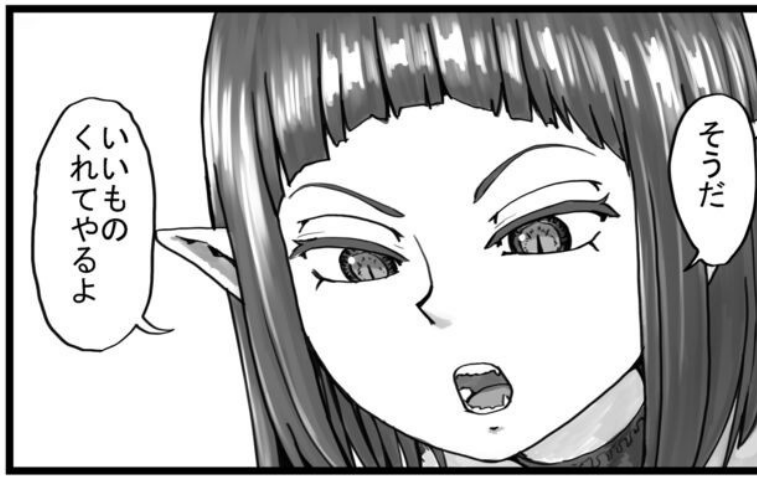
嫌な予感がした

気張っている

んん…

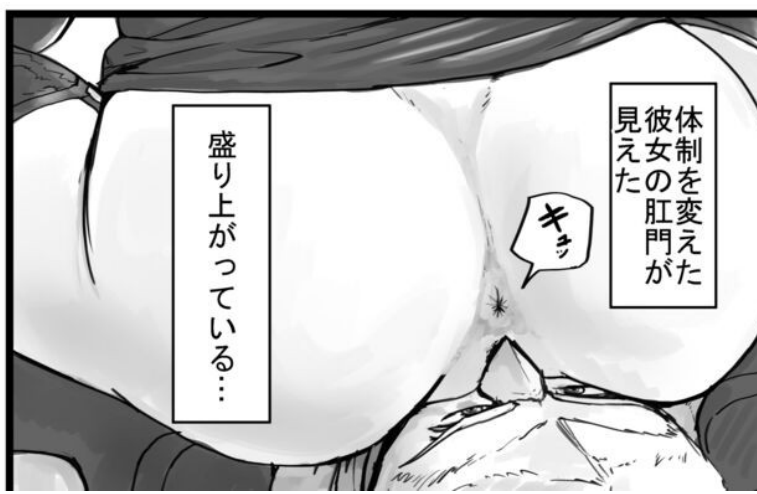
グッ

んん…



そっだ

いいもの
くれてやるよ



体制を変えた
彼女の肛門が
見えた

盛り上がっている…

キッ



しかも一発ではない

その後も
途切れることなく
尻の穴からガスが
放たれ続けた



普段何を
食っているのか
わからないが



凄まじい
悪臭だった

おげええ
臭すぎる……!



本気で
息が吸えない
肺が呼吸を
拒んでいる!



それでも
彼女は容赦なく
腸内のガスを
すべて絞り出した

私は半分意識が
飛んでいたと思う

便秘気味で
ガス溜まっ
しんどかつたわ

はー

プス〜



流石にうんこは
勘弁してやるよ

って
何気絶してんだ!

おい!

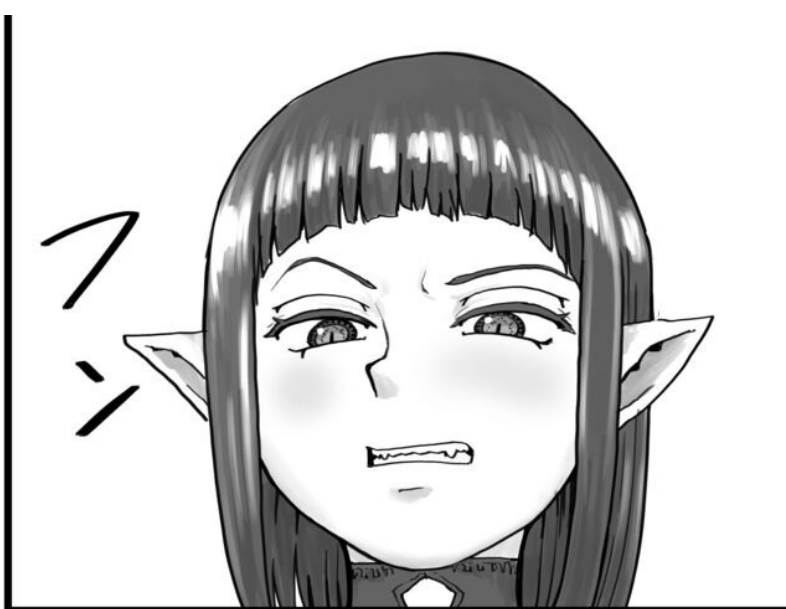
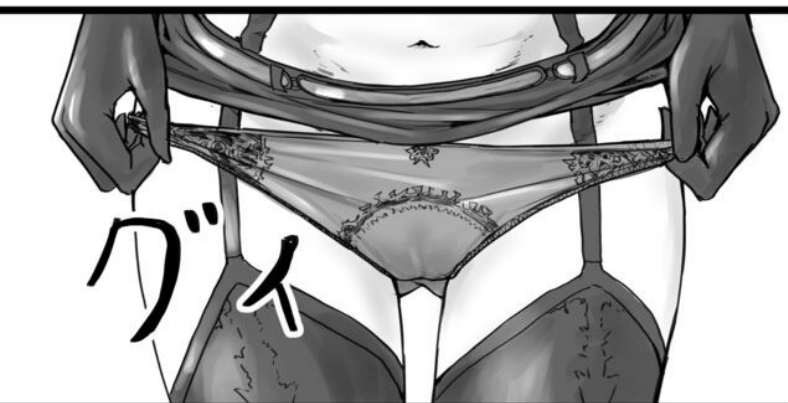
ガクガク



うひょ
こりやいな

くっせ...







そういうと
彼女は
私のも
去つて
いたら

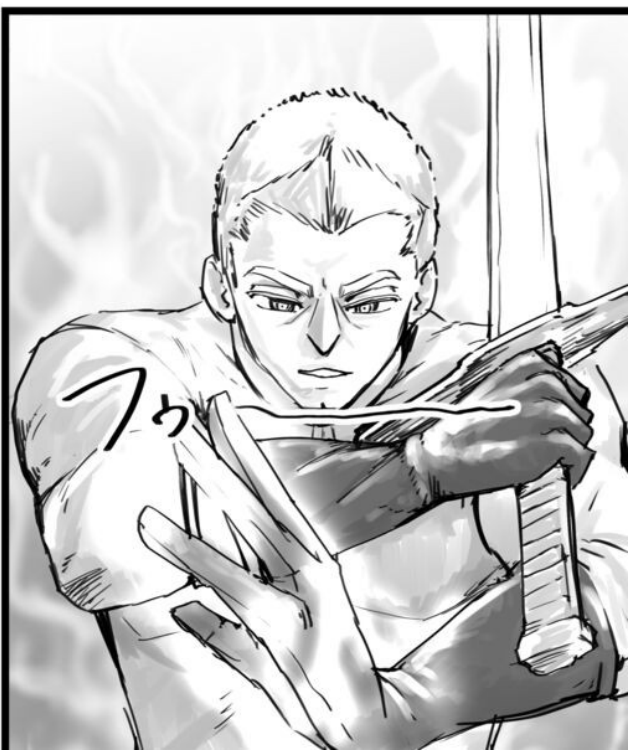
たく：
外套消し
飛んじ
まったよ...

こうして私は
九死に一生を得たのだった



それから
月は流れ
私は騎士
を辞めた

今は山に
籠もつて
日々鍛錬
を行つて
いる



はじめは
屈辱を晴らすためだった

ズズズ

だが月日が経つに連れ
自分が本当にしたいのは
彼女への復讐でないことに
気がついた

あの時の
辛く苦しく
屈辱的な仕打ち

はじめは怒りが
こみ上げてきたが
今ではあの憐れと
悔い満ちた目を
思い出すたびに
別々の感情が
沸き起こってくる

たまになく
彼女に会いたい…

無謀にも私は
再び魔族に勝負を
挑むため
旅に出ようと
考えている

会えるだろうか

どこにいるのか
わからぬ
名も知らぬ
あの魔族の女を

フゥ…